

五次元界モデルと超意識体

齋藤 忠資

我々はすでに4次元界が存在すれば時間と空間の制約を超えて臨死体験に見られる内部透視、360度視野、未来の記憶、全生涯展望といった超感覚的知覚が説明できることを考察した。さらに、何故体外離脱するときに必ず上から地上の状況を見るのか、又何故体外離脱する超意識体からは地上のものが見えるのに、地上の人間からはこの超意識体を見ることができないのかも解明した。¹⁾ 我々の宇宙をアインシュタインの4次元時空連続体と考え、我々の4次元時空連続体を超える仕方で5次元目の世界が存在するとすれば、臨死体験にみられる上記以外の通常ではあり得ない現象も説明できることを、この小論の考察によって明らかにしたい。

5次元空間の完全な知覚体からは3次元空間にあるすべてのものの内部を見ることも、3次元空間のある対象を360度の角度から同時にみることもできる。超意識体は4次元時空連続体の時間と空間の制約（距離による分離）を超えている。5次元界は我々の4次元時空界を超越しているので、我々には一切知覚できない。

I 5次元界と不可分の統合体と非局所性

線は無数の点の結合から構成されており、線はその線上すべての点を結合している。面はその面上のすべての線の結合から構成されており、面はその面上のすべての線を結合している。

立方体は無数の面の結合から構成されており、立方体はその立方体内のすべての面を結合している。立方体は同時に面上のすべての線と線上のすべての点を結合している。5次元は立方体をすべて結合しており、同時に立方体内のすべての面と線と点を結合している。5次元では、3次元で分離している部分（物体）がすべて統合されている（重ね合わせ・共存）。

²⁾

従って5次元界の超意識体は、臨死体験において見られるように、我々の物質界のどの空間上かつ時間上の点にも自由に接することができる。言い換えるならば、5次元界の超意識体は、我々の物質界のどの空間にも、どの時間にも遍在している。（意識の遍在）³⁾ 5次元界は我々の物質界を内包（内在）していると同時に超越している。

我々の物質界は5次元界の部分であるが、同時に5次元界は、我々の宇宙とは別の所に存在しているのではなく、重なり合う仕方で共存している。世界は一つであるが、我々人間には、脳と肉体の制約によって、物質界しか知覚できないだけである。

ベルの不等式とアスペ等の実験によって、一度相互作用した二つの電子は、どんなに遠く離れていても全く時間を要せず、情報を伝達なしに、かつ因果関係もなしに、互いに反応し合うことが実証された（非局所性）。またウィーラーの遅延選択実験の成功によって、光子の無時間性も実証された。このことは物質界の時間と空間による分離（距離と過去・現在・未来）を超えた、すべてのものが分離することが出来ない仕方で一つの統合体を形成している世界が存在していることを示唆している。⁴⁾ D.ボームは、この非局所性を高次元空間モデルから説明している。例えば水槽中の魚の泳ぎを前方とサイドから2台のテレビカメラで写して、2台の受像器で魚の動きを見ると、両者の動きは即時に対応している。両者の間には情報の伝達も因果関係もない。画面は3次元の实在（魚）の2次元射影（断面）であって、3次元实在は2次元射影を含むが、2次元射影のどちらでもなく、それらを超ええている。同様に量子の非局所性の場合でも因果関係はなく、電子は高次元空間の实在の射影（断面・ホログラム）に過ぎない。包み込まれた秩序は高次元空間であり、すべての部分が完全に相互に結合し合っていて、分離することができない仕方で一つの統合体を形成していて、ホロムーヴメントになっている。⁵⁾ 5次元空間ではすべての部分は完全に相互に結合していて、分離できない仕方で一つの統合体を形成されているとすれば、電子の非局所性は、5次元空間にある实在の3次元空間上での射影であるといえよう。⁶⁾

II 5次元界と空間的不可分性

(1) 5次元界と遠隔透視

2次元空間では線で遮られると、その線の向こう側のものは見えないが、3次元空間を用いて上から見れば、線の向こう側のものもすべて一望できる。同様に5次元界からは3次元空間のすべてのものがなにものにも遮られることなく一望できよう。従って変容した超意識体の出来事であれば、遠隔透視の例は説明できよう。

(2) 5次元界と360度完全視野

臨死体験の事例には、超意識体が360度の完全視野を備えていたというものがある。360度視野といっても具体的には2種類ある。一つは超意識体が全く体を動かすことなく、自分の周囲のものを360度同時に見ることができるというものである。⁷⁾ これは3次元空間から2次元空間のすべてものが同時に一望できるように、5次元空間から3次元空間のすべてのものを一度に一望できる事から理解できる。⁸⁾ 「宇宙の中心では、全方位で完全な360度の視界を体験した。」⁹⁾ 言われているが、宇宙の中心が5次元の宇宙意識の世界であれば、光の存在は360度の完全視野を備えているものと思われる。

今一つは、対象物が一度に360度すべての角度から完全に見えるという例もある。これは超意識体がトンボのように球状視野を備えていても不可能である。しかし3次元空間から2次元空間の立方体が360度の角度から同時に見えるように、5次元界からは

3次元空間の立方体を一度に360度の角度から見ることができる¹⁰⁾。

例を挙げると「臨死体験の時、体外離脱して私はベッドの上の自分の身体を360度、前、後、側面から同時に見た。」¹¹⁾

「私は生まれて初めて自分の姿（ベッド上の自分の肉体）を3次元で見えていました。鏡に映った自分の姿は平面でしかない。霊の目はあらゆる方面から、しかも一度に見えてしまう。前から、後ろから、横から思いのままに。」¹²⁾

しかし臨死体験の例の中には、5次元界の対象を360度すべての角度から見る事ができたと言われているものがある。

「光の世界では、天使を360度の角度から見る事ができた。前方・後方・上から・下から・両サイドから等」¹³⁾

すでに述べたように、5次元界ではすべての部分が完全な仕方で相互に分離できない仕方で一つの統合体を形成しているため、5次元界には距離による分離というものはないと考えられる。従って5次元界には、固定した空間上の方位や位置（場所）と言ったものはなく、固定した形態というものはないと思われる。遍在する宇宙意識へと拡大した5次元界の超意識は、欲すればすべてが実現する思念形態（ホロムーヴメント）の世界になっているので、同時に空間上のいかなる視点でもとることができるから、5次元界の超意識は、5次元界のものを同時に360度の角度から見る事ができるものと考えられる。P.D.ウスペンスキーは5次元界について「測定できるものはない。立方体と共通するものはない。右、左、上、下、立体線、図形と似たものはない。同時にこのすべてが存在する。距離はない。弛緩的な特性（内的類似性や相違感、共感、反感）によって距離は決まる。」と指摘している。¹⁴⁾

このことは次の臨死体験から証言されている。「光の世界には方向も大きさもない。川、谷と言った場所もない。私は名詞（人間、場所、事物）であることを止め、動詞（行動）になっていた。」と述べられている。¹⁵⁾ ここでは光の世界には、固定した形態、従って物体、位置（場所）、方向と言ったものはなく、すべては関係の中のプロセス、行動、ホロムーヴメントになっていたと言われている、しかし内で思念形態が暫定的なイメージを生み出すことができる。別の例では「私は顔も体も持たない。私はどの方向へも顔を向けることはなかった。360度を同時に見る事ができた。空間中の眼球であるかのように、私はすべてのもの、至る所のすべてのものがわかった。360度のすべてを見ただけではなく、我々が備えていない他の感覚ですべてを知った。」¹⁶⁾ といわれている。この例は超意識体には固定した体や顔がないこと、従って方向というものもなく、宇宙の全知識をキャッチできることを示している。対象物を360度の角度から同時に見ないと、完全知識とはならないであろう。

「私は体を備えていたが、肉体とは全く別のもの。私は浮動する眼球のように360度1度に見えた。そこには方向も大きさもない。」¹⁷⁾ この2つの例では、体について相矛盾していることが述べられているが、固定した形態は5次元界にはないので固定した体は

ないが、思念形態として暫定的な体は生成することができるものと思われる。

「体外離脱した時は“あそこ”を“ここ”と感じた。」¹⁸⁾ 「“あそこ”は私が“ここ”と思った瞬間“ここ”になった。“ここ”とか“あそこ”というのは、私という存在がその瞬間に定義する尺度にすぎない。」¹⁹⁾

瞑想中にも似た体験が報告されている。

「深い瞑想状態の1つの間、とても深く驚く体験をした。私の両目は閉じているが、突然すべてのものを見ることができた。1部屋全体の中の自分を。どこから私は見ていたのか分からない。私の両目から、あるいは1つの視点から私は見ていなかった。至る所から私はすべての物を見ていたようだ。私の体のすべての細胞と私の周りのすべての粒子の中に両目があったようだ。私は同時に前方から、上から、下から、背後から等々見ることができた。・・・見られた物から離れた観察者はいないようだった。覚醒のみがあった。」²⁰⁾

「瞑想中は肉体から解放され、透過性の光の流れとなって全身の気孔から外に流れ出した。肉体という殻に限定されていた感覚が拡大され、周囲の原子すべてを自分の体として感じる。今や広大な全方位的視野に変わって、上下、左右、前後の一切のものが同時に知覚された。」²¹⁾

これらの例は肉眼という制約を離れて、対象物と一体になり（万物一体性）対象そのものになって知覚することを示している。

(3) 5次元界とテレポーテーション

すでに述べたように、5次元空間ではすべての部分が完全な仕方で相互に結合し、分けられない仕方で、一つの統合体を形成しているため、異なる二点間の距離をいう分離は存在しない。臨死体験には、体外離脱した超意識体が我々の3次元空間をテレポートする例が多く報告されているが、これは未知のエネルギー体が5次元を用いて、我々の3次元空間の異なる二つの地点をテレポートするために考えられる。注意すべき点はテレポーテーションが3次元の特定の地点から別の特定の地点に瞬間移動するという点である。5次元の非局所意識体にとっては、物質界の空間による分離からは解放されているが物質界の特定の空間上の特定の対象に自らを局所化するためであると思われる。

5次元界では、距離による分離と言う空間が存在しないのに、5次元の光の世界でも未知のエネルギー体がテレポートしている例が見られるのは、3次元の世界に戻った臨死体験者が、5次元での体験を3次元の世界に合うように、脳が解釈しているためであると考えられる。

(4) 5次元界と物体の素通り・タッチ不可

D.ボームによれば、高次元空間（包み込まれる秩序）ではすべての部分が分けられない仕方で、一つの統合体を形成しているため、それが3次元空間で射影（断面・

ホログラム)として作用すると、抵抗がゼロになり、コヒーレンス状態となり、超伝導・超活動現象が生じる。超伝導では絶対零度の物体内を、電子がまるで何もないかのように物体を通り抜けていく。²²⁾ 臨死体験では肉体(物質)から解放された超意識体が物体や人間を素通りし、物体や人間にタッチすることができないという事例が多く見られる。肉体(物質)から解放された超意識体は、電磁力と相互作用しないので、すべての物体や人間にタッチできないものと思われる。

(5) 5次元界説と臨死体験の相違点

5次元界説では、5次元空間の物体は3次元空間に接することができる。(従って足跡が見える)5次元物体の断面が3次元の人間にも分かる。3次元の金庫のドアを開けずに内部のものを盗み出すことができる。²³⁾しかし臨死体験では、肉体(物質)を離脱した超意識体が3次元の人間にも見ることができるという例はない。また3次元の金庫のドアを開けずに、内部のものを取り出すことができるといった類の例も見られない。このことは5次元界説のすべての点が、臨死体験に妥当する訳ではないことを意味している。臨死体験体の場合には、すでに述べたように肉体(物質)から離脱した超意識体が電磁力と相互作用をしないために、すべての物体を素通りし、物体とタッチできないものと考えられる。

III 5次元界と未来と過去の透視

アインシュタインの4次元時空連続体説では、時間は4次元目として空間化されているので、我々の宇宙の事象はすべて静止状態で存在している。しかし人間はタイムリミットという脳による制限を受けるので、現在しか知覚することができないために、本来静止している世界の事象が、時間と共に変化していくように見える。しかし5次元界の完全な知覚体からみれば、4次元時空連続体の事象はすべて、静止して存在しているだけであることがわかるだろう。これを例えてみれば、夜飛び立つ飛行機の窓から見ると、飛行機の照明灯が次々と過ぎ去るのが見えるが、上空から見ると照明灯からは飛行場で静止して存在しているだけであることがわかるようなものである。言い換えるならば5次元界の完全な知覚体からは時間(過去・現在・未来)をどの瞬間でも同時に²⁴⁾すべてを一望できるので、現在しか存在しないと言うことである。ここで看過されてはならない点は、4次元時空連続体では時間は空間化されているので、時間には過去・現在・未来という区別は空間上の区別として存在するが、5次元界の知覚体の目から見ると過去と現在と未来の出来事がすべて同時に一望できるということである。臨死体験では、本人が5次元の非局所的知覚から自分の生涯全体を4次元時空連続体の時間の順序に従って瞬時に展望するという事例が多く報告されている。²⁵⁾

IV 5次元とテレパシー

すでに述べたように5次元ではすべての物が完全に相互に結合し合って、分離することができない仕方で、1つの統合体を形成している。個は存在しているが、オーケストラのように、個の完全にハーモニーを形成して、全体として1つに統合されている。主体と客体の分離というものそこにはない。従って5次元界が物質ではなく意識によって、構成されているとすれば、すべての超意識体が、言葉という手段を用いることなしに、心から心へ直接瞬時に互いに意志を通じ合うことができ、完全に相互に理解し合えるものと思われる。臨死体験では、体外離脱して5次元界に変容した超意識体が、地上の人間の心が読めたという例や、体外離脱後の超意識体同志と光の世界の光の存在と、言葉なしに心から心へと直接意志を伝え合うことができたという事例が多く見られる。肉体もなく、言葉も用いる必要もないので、意図を隠したり、誤解したりすることもないと言われている。

V 5次元界と宇宙意識と個人意識

5次元界の完全な知覚を備えた宇宙意識が存在するとすれば、宇宙意識は非局所的な振動する意識の統合された場所であろう。すでに指摘したように、5次元界では4次元時空連続体のすべての部分を完全に相互に統合した仕方で、時間と空間の分離なしに、1つに統合しているので、宇宙意識は我々の宇宙の全情報を持っている。脳は5次元界の宇宙意識を我々の物質界にマッチした仕方で変換した結果として、我々の通常の個人意識が成立しているものと考えられる。従って宇宙意識と比べると、我々の通常の個人意識は、この物質界で生きるのに必要なものに限られているために、知覚能力も受信する情報もかなり制約されている（脳バルブ説）。意識そのものは場のような存在なので、脳、肉体内に内在すると同時に、脳・肉体を超えた5次元界にも超意識体として存在できる。通常我々が意識を自分の脳内にあると思っているのは、5次元界の非局所意識を脳内に局所化しているためであろう。ホログラムでは3次元の立方体が2次元のフィルムの中に織り込まれた秩序を形成しているように、個人意識は本来5次元の宇宙意識が脳・肉体（4次元時空連続体）内に織り込まれたホログラム（射影）であるといえよう。ホログラムではコヒーレンスをフィルムに照射しない限り、3次元像は表出されることはないように、日常の感覚の時には、意識は脳・肉体内にあると感じられない。宇宙意識と一体となった時、臨死体験が真のホームに戻ったと実感し、宇宙意識を物質界に誕生する以前から知っていたことを思い出すのは、個人意識が本来5次元の宇宙意識に由来するからだと思われる。意識は本来5次元界に源があり、4次元時空連続体の物質体（脳・肉体）とは起源を異にしている。体外離脱で意識だけが5次元界に移行し、肉体は物質界に残されるのはそのためであろう。この点は多次

元的二元論（ホーラルキー）を指示しているが、通常二元論を支持していない。

体外離脱によって、個人意識は脳によって物質界に制約された状態から解放され、5次元界の宇宙意識へと変容する。この時個人意識は宇宙意識と一体になるまでは拡張し、宇宙意識の全知識と完全な知覚能力をあずかる。臨死体験の多くの事例にみられる空間上の透視（内部透視・遠隔透視・360度完全視野）や時間上の透視（過去と未来の透視）やテレポーテーションや言葉なしの完全な意思伝達と完全な理解がこの点から説明できる。

すでに考察したように、体外離脱した超意識体から地上のものが見え、地上の物音も聞こえ、地上の人間の話し声もわかるが、逆に地上の人間からはこの超意識体を見ることも聞くこともできない。²⁶⁾ またすでに指摘したように、体外離脱した超意識体からは、地上の人間の心は読めるが、地上の人間からはこの超意識体の心は読むことができない。体外離脱した意識が、4次元時空連続体から5次元界に変容したとすれば、このような現象は可能である。さらに体外離脱した意識体が必ずと言っていい程、何故上から地上の状況を見下ろすのかも、5次元界モデルからのみ説明できる。なぜならば5次元界に移行した非局所心は、4次元時空連続体内に存在するものを肉体を超えた外から見るからである。もっとも必ず上から見るということは、肉体から解放された超意識体は、重力から自由になることと関連していよう。単なる超感覚的知覚説ではこれらの点は説明できない。

また臨死体験者が自分の全生涯を展望する時に、4次元時空連続体内の自分の過去と未来の出来事を外から第3者のように瞬時に一望する点も5次元という視点から解明できる。

VI 5次元界への移行と脳と意識の変容

J.E.バイヒラーは臨死体験が物質界の個人意識が脳に通じて5次元界の普遍的意識へと移行・変容する出来事とみている。²⁷⁾

L.オーダインによれば、臨死体験は脳の特別の神経単位の要素が自己組織化したマトリックス（意識）がトンネル（ワームホール）を通過して超空間へと変換される出来事とする説を唱えている。²⁸⁾

R.ラッカーは脳が薄い5次元の高次元厚みを備えていて、心が脳を超えて超空間に侵入していることは可能だとしている。²⁹⁾

J.C.マックスウェルも、人間の魂は、もつれた結び目であって、それをほどく秘密は5次元空間にあるとみていた。³⁰⁾ 宇宙意識と超意識体が5次元空間と関連していれば物質界の4次元時空連続体内に含まれていないので、物理的には観察不可能である。

J.R.スミシーズは、意識を精神空間とみなし、4次元目の空間と解して、脳が4次元空間の意識と3次元空間の物質界との接点であり、相互作用している所であると主張

している。³¹⁾ A.L.ランスキーも意識を3次元物体(肉体)に作用する5次元の力であり、統合する場であるとみている。³²⁾ これらの説が正しければ、体外離脱現象は意識と肉体と物質の2元論ではなく、2元的知覚にすぎないことになり、意識は肉体内には含まれていないことになるので、意識と肉体が分離するプロセスを報告している事例をうまく説明できない。

佐々木茂美は、無形の5次元界には、時間と空間と量子真空のゼロ点エネルギー、気、サトルエネルギーといった未知のエネルギーが存在しており、その宇宙エネルギーがゼロ磁場と変性意識状態を介して我々の4次元時空連続体に流れてくることによって超常現象が引き起こされると唱えている。³³⁾ 我々のみるところでは、臨死体験と体外離脱こそ、ゼロ磁場での現象であり、4次元時空連続体(肉体)から個人の意識が5次元界へと移行・変容する典型的な出来事であると思われる。意識の変容は肉体と脳における周波数のアップによって引き起こされるものと考えられる。

臨死体験者によれば、肉体から解放された後に、我々の個人意識は宇宙と1体となり、真の自己を発見するという。我々は夜夢を見ている時には、目覚めている昼間の時の自己のことを全く知らないが、朝目覚めてみると、同じ自己が夢をみている時も目覚めているときも存続しており、夢は自己にとって生涯のエピソードに過ぎないことが分かる。この物質界での生涯を夢に、死を目覚めに例えるならば、通常個人意識は、この物質界での夢というエピソードであって、臨死体験は5次元界での真の自己の真の目覚めであると言えるかも知れない。このことが臨死体験のまさに人生回顧で生じることに他ならない。

VII 5次元界と臨死体験の事例

最後に5次元と明記している臨死体験の事例を紹介しよう。死なしの体験例であるが「トンネルの橋に、トップが開く青色の袋があり、その袋のトップの所にいくと、その袋から吐き出された。この時私は完全に5次元空間を理解できた。5次元界には過去・現在・未来のすべての人間の全知識の総計があった。すべての知恵は、集合的知識のプールから由来し、我々が学ぶすべてのことも、すべての人が利用できるようにプールされる。私はすべての時代の人間と人間が生み出したものを体験した。表面的には分からないが、我々は皆相互に結合している。我々は不可視のもので結合されている。・・・すべての時間は現在にあり、すべての空間はここに合った。人間のエッセンスと花のエッセンスが他の中の水滴のように集合していた。5次元では集合的であると同時に個があった。私は全面的に愛によって受容された。その愛は波動の形で伝わった。」と言われている。³⁴⁾

別の例では「体外離脱は脳によって物質界から5次元界へと自己意識が投射される出来事である」と言われている。³⁵⁾

D.ゴープルによると「物質界を超えて5次元界へと自分の意識は拡大すると、そこでは何も制約と境界を感じなかった。自分は全体の一部であり、区別がなかった。全知識が与えられ、自分の思いに従って対象を拡大したり縮小できた(思念形態)。すべての対象は、オーラに包まれ、絶えず形と色を変化させていた。5次元の光の世界は、この物質界よりも高い振動数にチェンジする出来事であり、原子構造の再配列、分子の変形、意識のシフトが生じる。高い振動数へとシフトしたために、渦巻きのトンネルを猛スピードで光の世界へと飛行したように感じられる。」という。³⁶⁾ここでは光の世界が5次元界であり、トンネルは5次元界の高い振動数への移行であるとされている。またすべてのものは思念形態として現実化されるので、固定した形はなく、5次元界には何の制約もないので、全知識が与えられると言われている。

他の例では「外から宇宙全体を見ることができた」³⁷⁾と述べられているが、これは5次元から宇宙全体を見たということであろう。

多くの事例では、臨死体験は通常の4次元時空を超えた高次元界であったと報告されている。³⁸⁾

ある臨死体験者は「我々の物質界とは振動数が異なる次元であり、理解も知性も異なる形をとっている」と述べており³⁹⁾、次元の違いが振動数の違いから生じることを示している。あるいは神秘体験で、物質ではないすべての生命とエネルギーの根源である天の光を10次元界で体験したという例がある。そこには時間と空間の制約がなかったと言われている。⁴⁰⁾

VIII 通常の知覚と5次元界の知覚の相違について

5次元界での知覚は、通常の我々の知覚(4次元時空連続体)とは違っている。すべに述べたように、5次元界ではすべての部分が相互に結合して、分離することの出来ない仕方で、1つの統合体を形成しているので、そこには時間と空間上の分離というものはない。見る主体と見られる客体とは完全に独立した存在ではない。固定した位置や方角や形態というものはない。視覚を例にとつて言えば、肉眼は肉体と顔によって制約されているが、5次元界の視覚は肉体(物質)から解放されている。個は存在するが、独立し分離した存在としてではなく、オーケストラの中の各々の音のように、全体として一つに統合された状態(ハーモニー)として存在する。ある臨死体験者が述べているように「遍在する場の中に絶えず流動する焦点のようなもの」として個は存在している。見る主体と見られる客体は一体化され重ね合わせになっている。5次元界では、すべての事象が同時に遍在しているので、視点が至る所に同時に存在することが可能となる。言い換えれば空間上のどの視点からも同時に対象を見ることが可能となるので、対象を同時に360度の角度から見るができる。我々の通常の視覚は、対象の表面に反射した光が伝える情報を、脳が情報処理した結果である。従っ

て対象の表面しか分からず、中身は分からない。これに対して、5次元界では、すでに指摘したように、見える主体と見られる客体は一体化しているので、対象の全てが分かる（中身も分かる）。5次元界では思念形態（thought form）がすべてを決定しているので、通常の5感のように、感覚が分離していないで、1体になっているものと思われる。この点は遠隔透視とテレポーテーションが5次元界では区別できないことを意味していよう。

【引用文献】

- 1) 4次元空間と臨死体験、人間文化研究 9, 1～22, 2000.
- 2) J.R.Violette, Extra Dimensional Universe, 31.182, Booklocker, com. Inc. 2002 ; P.D ウスペンスキー、ターシャム・オルガムス、327, コスモス・ライブラリー、2000.
- 3) 斎藤忠資、時間と空間の分離を超える意識、人間文化研究, 12, 1～15, 2003.
- 4) R.Nadeau & M.Kafatos, The Non-Local Universe, 185～190, Oxford University Press, 1999.
- 5) 全体性と内蔵秩序、315～318, 青士社, 1986.
- 6) 同書, 346 以下。
- 7) 事例は 1) の 15～17 をみよ。ここでは 1 例追加する。「臨死体験中に体外離脱し、強度の近視者であるが、360 度同時に見えた。すべてが鮮明に細部まで。防音用の天井のタイルの穴と同時に床のタイルの中の複雑な模様を見た。本人の母が病院の正面玄関から入ってくるのと待合室にいる夫と二人の息子とを同時に見た。その時待合室の壁の時計は午後 4 時 7 分を示していた」という。(Ruth's Experience, [www.oberf.org / Ruth's %20 OBE. htm](http://www.oberf.org/Ruth's%20OBE.htm)) これらの点は、後に事実であることが確証されている。またこの例では「数えなくても、天井のタイルの穴の数が分かった。」と言われており、通常の視覚を超えた完全視覚を示している。
- 8) これは目が顔の前方にしかない人間には不可能であるが、例えばトンボのように 360 度を見ることができ球状視野を備えていれば、この 3 次元空間でも可能である。球状視野というのは 360 度視野を脳が 3 次元空間用に切り替えたイメージである。
(F.G.Greene, The Out-of-Body experience, extrasomatic or intrasomatic phenomenon? The Journal of Religion and Psychical Research, 6, 174～175・177, 1983) なぜならば、5次元界では固定した形態というものは存在しないと考えられるからである。
- 9) K. Ring and E.E. Valarino, Lessons from the Light, 295. Insight Books, 1998 ; K.Williams, The love of the universe, www.near-death.com/rivers.html.
- 10) Cl.A. Pickover, Surfing through Hyperspace, 30.51, Oxford University Press. 1999 ; M. カク, 超空間 97, 翔泳社, 1994.
- 11) Shirley, www.aleroy.com/boad 106, htm.

- 12) B.イーディ、死んで私が体験したこと, 53, 同朋社, 1995.
- 13) D.Morrissey, You Can See The Light, 28, Stillpoint Publishing, 1997.
- 14) ②のターシャム・オルガムス、327.
- 15) Ray K. www.nderf.org/ray-k's-nde.htm.
- 16) Jo Dee Chenaur, www.seattleiands.org/stories/universe.htm.
- 17) ⑮と同じ。
- 18) Shannon.C. www.oberf.org/shannon-c's-obe.htm.
- 19) Some thoughts on my near death experience, web, triton.net/potentialspas/kessays/neardeath.htm.
- 20) J.Liberman, Take off Your Glasses and See, 47, New York : Crown, 1995.
- 21) パラマハンザ・ヨガナンダ、あるヨギの自叙伝 149, 森北出版、1983.
- 22) ⑤の 315～318. 322.
- 23) ⑩の M.カク、超空間、67～70. 86.
- 24) 臨死体験の事例については③の 7～8 頁。
- 25) 斎藤忠資、ホログラフィー宇宙と臨死体験の世界. 人間文化研究 11, 36～37, 2002.
- 26) ①の 1 頁。
- 27) Strange facts find a theory : A new dimension for psi, The Journal of Paraphysics, 1998 ; Life and death in the big city! , The Journal of Paraphysics, 2000.
- 28) Near-death experiences and the theory of the extraneuronal hyperspace, Journal of Near-Death Studies, 103～115, 1999.
- 29) 4次元の冒険、44. 67, 工作舎, 1989.
- 30) 同号、110.
- 31) J.R.Smythies, The Wall of Plato's Cave, Avebury, 1994.
- 32) A.L.Lansky, Consciousness as an active force, www.renresearch.com/consciousness.html.
- 33) 見えないものを科学する, 16～18. 53～59. 66～67, サンマーク出版、1998 ; 「零磁場」には 5次元世界が現れる、船井幸雄編、意識・ホーリズム・新エネルギー、42 頁、ビジネス社, 1997.
- 34) Jean, www.nderf.org/Jean's-NDE.htm.
- 35) S.Muldoon & H.Carrington, The Phenomena of Astral Projection, 72～73, Rider, 1957.
- 36) Near-Death Experience, www.chariscorp-wordgems.com/death.nde.case.goble.html.
- 37) James` NDE, www.nderf.org/James-NDE.htm.
- 38) B.F.Reyes, Scientific Evidence of The Existence of the Soul, 1948 ; L.Nelson and, R.Nelson Near Death Experiences, 153, Cedar Fort : Springville, UT, 1994 ; M.R.

- Sorensen. and D.R Willmore, *The Journey Beyond Life, I*, 90, Oren, UT : Family
Affair Books, 1988 ; R. ムーディー、*かいまみた死後の世界*, 36 ,評論社,1985
- 39) D's NDE,www.nderf.org / D's %20 NDE.
- 40) P.M.H.アトウォーター、*光の彼方へ*、133～134,ソニーマガジズ、1995.